

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第549号 平成25年5月27日

快挙

80歳のプロスキーヤーで冒険家の三浦雄一郎さんが、日本時間の23日正午過ぎエベレスト登頂に成功しました。

三浦さんは、今月16日に標高5300メートルのベースキャンプを出発、「アイスフォール」や「ローツェ・フェース」等の難関をものともせず、標高8848メートルの頂上を目指していました。

今回の成功は、70歳と75歳の時の成功に続き3回目というだけでなく、5年前に76歳のネパール人男性が作った世界最高齢での登頂記録をも塗り替える事になりました。

登頂に成功した三浦さんは、東京で朗報を待つご家族に衛星電話で「エベレストの山頂に着きました。世界最高の気分です。これ以上ないぐらい、疲れていますが、80歳でもまだまだいける。ヒマラヤが眼下に見えて美しいです。頑張って、頑張ってたどりつきました」と、喜びいっぱいの思いを伝えています。

三浦さんは青森県生まれの80歳。北海道大学在学中はアルペンスキーの選手として活躍しました。その後プロに転向、1964年にはイタリア・キロメーターランセに日本人として初めて参加、時速172.084kmという世界新記録を樹立します。その後も、1966年には富士山直滑降。1970年にはエベレスト・サウスコル8000mという世界最高地点からのスキー滑降（ギネスブック掲載）を成し遂げています。

エベレスト登頂については、2003年に70歳で初登頂に成功。その5年後の2008年、75歳にして2度目の登頂に成功しています。現在は、クラーク記念国際高校の校長を務めておられます（ミウラ・ドルフィンズの資料から）。

三浦さんは、病気やけがに悩まされた時期もあったそうですが、「夢を見ること、チャレンジすることが私のテーマだと思っている」と述べておられるように。60代半ばにさしかかったところで「70歳でエベレストに登る」という新たな目標を設け、飽くなき挑戦者としての新たな一歩を踏み出します。とはいっても、そう簡単な話ではなかったようで、三浦さんのお話によれば「手始めに札幌の自宅近くにある藻岩山に登ってみました。標高500mちょっと、地元の幼稚園児が遠足で登る山です。なのに息が上がり、途中でのびてしまった。こんなことで本当にエベレ

ストなんて登れるの？」とかなり弱気になったそうです（朝日デジタルのインタビュー記事から）。

以来、猛烈なトレーニングが始まります。事務所内に低酸素室を設置して高所対策のトレーニングを実施したり、毎日何十キロという重りを身に付けて暮らしたりと、三浦さんの年齢を考えると、それは驚くばかりです。

運動音痴の私からすると過酷とも思えるトレーニングですが、三浦さんは「トレーニングを重ねることで体は確実に変わっていった。すると、気持ちもどんどん前向きになっていきました。体が太った原因は運動不足と食べ過ぎ、飲み過ぎでしたが、実は目標や夢を見失ってしまったことで、心までメタボになっていたんですね。」と述懐しています（朝日デジタルのインタビュー記事から）。

「身体と気持ちは不離一体」という事ですが、三浦さんがおっしゃると説得力がありますね。

登山家の田部井順子さんは、80歳という年齢は、普通に生きて行く事さえ大変な年齢なのに、エベレストにチャレンジしようという気力は圧巻、と述べていますが（5月23日付朝日新聞）、全く同感です。

80歳でのエベレスト挑戦は、5年前の2回目のエベレスト登頂の時から始まっています。しかし、これまでの道筋は決して順調ではありませんでした。2009年には札幌のスキー場での事故で骨折、また、ヒマラヤでのトレーニング中に不整脈が再発し手術を受けるという大きな危機に見舞われています。それを克服してエベレストの頂上に立つことができたのは、三浦さんの夢に向かって突き進むという強烈な迄の気力に外なりません。

また、登山に当たっては、三浦さんの年齢や体力を考慮し、ベースキャンプに入るまで1日の移動距離を過去2回の半分に抑えたり、キャンプ出発の後は、通常の登山隊より2つ多い6つのキャンプを経由したとの事です。三浦さんは「ウサギとカメのお話のカメのごとく、歩みはゆっくりだけど最後まであきらめない。それが、結果として成功につながる」と述べていますが、あくまで三浦さんのペースを維持した事が成功に結び付いたのだと思います。

そして、達成感や成功という喜びは、夢を抱き、その夢の実現のために気力と体力を充実させ、弛みない努力と準備を重ねた者にしか許されないのだという事を、三浦さんの挑戦を通じて、改めて実感しています。（塾頭：吉田 洋一）